



看護のポイントシリーズ9

RSウイルス感染

RSウイルスは主に呼吸器感染症をおこすウイルスです。秋から冬にかけて流行する呼吸器感染症の原因になる代表的なウイルスです。1歳までに50~70%が罹患し、3歳までに100%近く罹患すると言われています。反復感染するため、何度も感染しながら徐々に免疫を獲得します。

RSウイルスによる呼吸器感染症の程度は軽症の感冒様症状から重症の細気管支炎や肺炎に至るまで様々です。初めての感染では感冒様症状のみでなく、気管支炎などを起こす危険性が高く、また、年齢が小さい時（生後6ヶ月以内）の感染ほど重症となる危険性があります。年齢が大きくなるほど、重症になることは少なくなり、学童期から成人にかけては軽度の感冒様症状のみで終わることがほとんどです。

感染後4~5日の潜伏期ののち、鼻汁、咳、発熱などの症状が現れます。この後、気管支炎や細気管支炎、肺炎を発症すると、咳の増強、呼気性の喘鳴（ぜいぜいする）、多呼吸などが現れてきます。細気管支炎にかかった後は、しばらく喘鳴を繰り返す場合があります。

以前は他のウイルス感染症と区別がなかなかできませんでしたが、最近では、迅速検査で診断が簡単にできるようになりました。

治療は対症療法が主体になります。喘鳴を伴う呼吸器症状に対しては去痰剤や気管支拡張剤などを用います。脱水気味になると、喀痰（かたん）が粘って吐き出すのが困難になるので、水分の補給に努めます。細菌感染の合併が疑われる場合は抗生剤を使用します。

